

仰せのままに
お嬢さま!
Yes, My Master!

小説 栗栖ティナ
挿絵 中乃空



登場人物紹介

Characters

あたしの為に怒ってくれた……
ちゆ、忠誠心は評価してあげる！

いずみ ゆりか
和泉柚莉香

純が仕えることになったお嬢様。
世間では我が侂だとか評判が悪い
けど……？



なごつばき
名護 椿

日本の華族の中でも有数の名家の一人娘。柚莉香とは喧嘩友達という間柄。

借りができてしまひましたね、可愛いメイドさん



かみしろじゅん
神代 純

本作の主人公。ある理由から女装し、メイドとして柚莉香に仕えている。

ふふっ、もてるメイドは大変ね、純ちゃん♪



やぐるまりさ
矢車 理沙

和泉家に仕える先輩メイド。お茶目な性格で、純をよくからかってくる。

プロローグ ボクはメイド？

一章 ヒミツのメイド生活

二章 ライバルもお嬢様

三章 お嬢様の挟撃!?

四章 ボクは誰のモノ？

エピローグ 終わらないメイドライフ

「ふふつ、普段は『ボク』なのね。その呼び方も可愛いわ。言ったでしょう？ わたしがわざわざ、こんな恥ずかしい服を着てやってきたのは……ご褒美をあげる為だって」

鮮やかな赤色の舌先で、頬の余韻を楽しむように唇を舐めながら、淫靡なメイド服に身を包んだ美女が、意味深に囁く。

「でも……ボクは、その……」

性別を偽って屋敷に雇い入れてもらった、大罪人。自分をそう思っていた純は、その言葉の意味が理解できず、ただ小さく首を傾げる事しかできない。

「純ちゃんが男の子でも女の子でも、そんな事、問題じゃないの。だって、お嬢様はそれを知った上で、あなたを雇い入れて……あんなにも楽しそうにしていたのだから」

「た、楽しそう……ですか？ でも……昼間、怒らせちゃったりしたし……その……」

「お嬢様は、ああ見えてとても人見知りなの。よほど気に入って、心を許した相手の前でなければ、あんなに素の自分を出したりしないわ。昨夜、明日から純ちゃんが来るからって、お嬢様がどれだけご機嫌だったか。写真に撮って見せてあげたかったわ」

「そう……なんですか？」

自らが仕える令嬢の、世間での評判と自分への態度が大分違うとは感じていたけれど、それは、自分の前で滅多に見せない素の姿を晒してくれているという事なのか。

だとしたら光栄……いや……何だか、凄く嬉しい。

「んっ……ふふつ、ここがビクンッて一気に大きくなっちゃったわよ、純ちゃん？ お嬢

様に好かれているとわかって、嬉しくなっちゃったのかしら？」

「ふえっ!? そ、そんな事……だつて、ボクは使用人ですから！ 仕えるご主人様に邪な事思つたりとかしちや、いけませんし！」

仕える家の人間との色恋沙汰は、使用人として最も禁忌とされる事。それを破つた者は即座に勘当というのが、例外を許さない神代の家の厳しい掟。

(違う！ 好きとかじゃなくて……嫌われていないとわかつて、ホッとただけ……)

「ここをこんなに対応させながら言つても、説得力はないけど。まあ、いいわ。とにかくお嬢様もわたしも、今のままの純ちゃんを認めて、気に入っているの。だから、外にバレない限り、何も心配する事はないわ。これからもよろしくね、純ちゃん」

「は、はい！ わかりました。あの……ありがとうございます」

とりあえず家から追い出されず、この屋敷で……袖莉香の下で、メイドを続ける事ができる。その事に安堵し、小さく息をついた直後。

「そういうわけで……わたしからのささやかな、ご褒美よ。明日からもたくさん働いてもらわないといけないし、たつぷりフレッシュユさせてあげるわ」

理沙は濡れた唇をチロチロと舐め回しながら、少しずつ身体を下へ滑らせ始めた。

お腹に押しつけられていた西瓜の如き対の膨らみが、純のエプロンと大きく擦れ動く。その摩擦でキャミソール状のメイド服が大きくずれ落ち、無理矢理押し込まれていた巨大な乳脂肪が、プルンツと音が聞こえてきそうな勢いでそこから飛び出してしまふ。

「矢車さん……それ……あの……えつと！」

見てはいけない。理性が頭の中で必死に叫ぶが、その大きく見開かれた視線は、圧倒的なボリュームの肉塊に吸い寄せられてしまう。

バレエボールを丁度半分に切ったような、形崩れなどまるでない美しい隆起。その肌面は他の部分と同じ絹のような滑らかさ。少し火照ってきているのか、頬と同じような淡い朱色に染まり始めていた。

その頂点でツンと真つ直ぐ尖っているのは、先程まで服にボタンの如く突起を作り出していた、小指の爪程の肉粒。純の戸惑う視線を誘うように、呼吸に合わせて小さく揺れ動き、甘酸っぱい香りを振り撒きながら自己主張している。

両手を使って片方を包み込めるか否か、それ程の大きさでありながら、形も見事な美巨乳。生まれて初めて生で見る女性のその部分が、股間の方に向かって滑り落ちていつている。その官能的な光景から目を背ける事など、既に心が熱く昂り始めている黒髪のメイドに、到底できる事ではなかった。

「やっぱり純ちゃんも男の子なのね。ここ、気に入ってくれたかしら？ 男で巨乳が嫌いな奴は居ないって、うちの旦那様が日頃力説しているけど……事実だったみたいね」

「ふえっ……あ……ごめんさい！ ボク、見ちゃって……あの……」

「良いのよ、見せてあげたくて、わざとずらしたんだから。ふふっ、どう？ わたし、ここには結構自信があるんだけど……気に入ってくれたかしら？」

「え……あ、す、凄く綺麗で大きくて柔らかくて……ふあつ、あ、ごめんなさい！ こんなエッチな事、考えちゃって!! あ……」

「ふふつ、そんなに褒められると照れちゃうけど……嬉しいわ。だから——ご褒美♪」
頭を下げた純に妖しく微笑みかけた巨乳のメイドは、スカートの中で肉幹を弄んでいた手を引き抜くや否や、メイド少年の下半身を淑やかに包み隠していた深い色の布地を、拒絶する間もなく大きく捲り上げた。

間髪入れず、両手がストライプ模様の手拭の端を掴み、スルスルと慣れた手つきで一気に引き下ろされてしまう。

『ひっ』と、その小さな唇から擦れた悲鳴が飛び出すと同時に、まるでバネが仕掛けられているかのような勢いで、ピヨコンと赤黒い屹立が起き上がった。

手で巧みに刺激された上、魔性と言ってもいい魅力を放つ、見事な巨乳を間近で見せつけられているのだ。肉幹は今にもはち切れんばかりに膨れ上がり、先端には透明の雫が滲み出てきていた。

「触っている時から思ったけど……大きいわね、随分。顔が可愛い分……ここで、男の子だって、思い切り自己主張しているのかしら？」

「そ、そんな事聞かれても……あの、あんまり見ないでください！ 恥ずかしいです」

現れた肉棒を驚きの表情で凝視している先輩メイドに、黒髪のメイドは顔から火を吹きそうな羞恥を噛み締め、泣きそうな声で懇願する。

「あら、わたしも恥ずかしいところを見せているんだから、これでお互い様でしょう。それに……良く見ないと、ご褒美もあげられないから」

「ご褒美って、何なんですか！ あの……ボク、そんなのいいですから……」

「遠慮しないで。わざわざ、旦那様が隠しているエッチなDVDを借りてきて、勉強してきたんだから。純ちゃんに、気持ち良いご褒美をあげる為にね」

純の訴えに耳を貸す事もなく、理沙はその巨乳の両側面に自らの手をあてがいがい、軽く身体を起こした。わずかに縦に潰れ、楕円になった双乳の中央……弛む乳肉同士が押し潰れあっている谷間の下側を、天井に向かってそそり立つ肉幹の頂点に押し当ててきた。

——ヌプッ……。

「ひやあんっ！ ああっ、ああ……これ……ふあああっ！」

何をするんですか……そう問いかけようとした直前、理沙が大きく身体を前に倒してきた。小さく響く、柔肉が押し潰れる卑猥な音と共に、肉棒が双乳の谷間へあつという間に飲み込まれてしまった。

「ンッ……凄く熱い、オチンチン。手より……この方が、もつとはつきりと感じるわ」

「ふあっ、はあ……矢車さん、どうして……あんうっ、ああっ！」

「ふふっ、やっぱり男らしいのはここだけなのね。今の声、女の子の喘ぎ声みたいよ」

身体をゆつくりと前に倒し続けながら、巨乳のメイドが楽しんで微笑む。両手で脇を掴まれた双乳は、竿肌のあちらこちらに引っかかりながら下へずれ落ちていき、丁度、肉傘

の真下辺りから根元付近までを隙間なく包み込んだ。

手で握られる強い圧迫とは違う、淡く柔らかい感触。純は女の子みたいと称された情けない甘声を漏らしつつ、狂おしく背筋を仰げ反らせてしまう。

「パイズリ……って言うのよね、これ。旦那様が酔った時、たまにわたしにしてくれって迫ってくるのよ。勿論、その度にハイキックで丁寧にお断りしているんだけど……どう、感じてくれているかしら？」

「旦那様はダメなのに……あの、どうして、ボクには……ひゃうっ、ああ……」

「だって純ちゃんも可愛いもの。わたし、こう見えて可愛いものには目がないのよ」

そんな囁きと共に、谷間から力強く飛び出した亀頭へ、熱い吐息が吹きかかった。張り詰めた粘膜が甘く痺れ、思わず腰が浮いてしまう。左右から押しつけられた乳房の隙間を押し分けるように肉竿が進み、その摩擦が更なる快感を生み出した。

釣り上げられた魚のように、肉幹が根元からビクビクと痙攣する。マグマのように熱い感触が尿道をじわじわと昇り、先端に浮かぶ透明の雫の粒が大きくなっていく。

「初めてのわりには、上手くできていくかしら、わたし。オチンチン、悦んでくれているわ……あの時と同じ、栗の花の匂いが濃くなってきた……ちゅっ、んっ……はふっ、んふっ、ああ……んぐっ、ちゅうっ……ちよつと疲れるけど、もう少し頑張るわね」

ぬチュ、グチリイツ、ジュプツ、ヌチュウツ……。

くぐもった水音と同時に、先端をねつとりと熱い感触が包み込んだ。理沙の、薄く紅の

塗られた艶やかな唇がその部分を咥え込み、滲む雄液を啜り始めたのだ。込み上げてきていた熱液が、強い吸引に誘われて尿道を昇っていく。

それに促されるように、肉幹全体の快感神経が急速に目覚め、荒く息を漏らす度、意識が吹き飛んでしまいそうな甘美な感触が脳天まで響いてきた。

「じゅるっ、んうっ、ちゅぱっ、はぁ……ふふっ、純ちゃんの味……わたしのお口にいっぱい。少ししよっぱくて……エッチな味」

「矢車さん、もう、やめてくださいぁ……いいっ！ ボク、無理……これ無理っ！」

一度口を離し、伸ばした舌先で唾液塗れになった亀頭をチロチロと舐め回しながら、巨乳のメイドが上目遣いで囁きかけてくる。その甘く優しい言葉が、快楽に流されかけた気弱なメイド少年の理性を、脆く崩していく。

唾液と先走り汁の混ざった透明の粘液に塗れた亀頭が、舌で強く弾かれる度。肉傘が埋まってしまいうくらい、左右から火照った乳脂肪を押しつけられる度。腰まで蕩けてしまいそうな甘い快楽が、強くなっていく。吐息と共に漏れる声のトーンも際限なく高く擦れ、自分で出しているとは思えないくらい、愛らしい喘ぎ声になってしまっている。

「ちゅぱっ、はぁ……舐めても舐めても、お汁が溢れてきているわね。舌が、純ちゃんの味で染まってしまいう……ふふっ、おっぱいに挟まれるの、そんなに気持ちいいの？」

「うっ、そんなの聞かれて……もお、はうっ、あぁ……」

「恥ずかしくて言えないの？ そんなに可愛い声を上げていたら、『はい、そうです』って言っているのと同じなのに。……ふふっ、そんな反応を見せられたら、何だか胸の奥がゾクゾクしてきて……もつと苛めたくなっちゃうわ」

愉悅を嘯み締めるような呟きと共に、粘液に塗れた亀頭が、再び理沙の口内に啜え込まれてしまった。先程、口内を蹂躪された時と同じように舌が小刻みに動き、敏感になったそこがキャンデイのように舐め転がされる。

（舐められてる？ オチンチン、あうっ、舌で溶かされちゃうみたいには、熱いよお！）

たっぷりと塗りつけられた唾液が唇の端から垂れ、張り詰めた竿肌を伝って根元まで濡らす。肉傘の下も、鈴口から根元を繋ぐ裏筋も。余すところなく濡れたペニスが、踊るように身体をグラインドさせる理沙の動きに合わせ、巨乳の谷間で素早く擦りつけられる。

グチイと卑猥な水音を響かせながら重い乳房が揺れる度、身体のコを貫くような射精の衝動が込み上げてきた。歯を食い縛り、必死に堪えているが、根元に込み上げてくる熱液の量は増すばかり。無理矢理押し止めている分、白濁は燃え盛る炉の中の鉄の如く、ドロドロに濃縮されているようだ。

「はあんっ、ちゅっ、ふぁ……どうしたの？ 段々口数が少なくなってきたわよ。顔も真っ赤だし、そんなに我慢していたら……んあっ、か、身体に悪いと思うけど？」

「はあはあ……ううっや、矢車さん……はうっ、あぁ……」

「んふっ、ちゅっ、はあ……気持ち良いんでしょう、わたしのおっぱい。顔も声も女の子



(何でこんな姿勢に……下着……着けてない……ええっ!!)

意識が吹き飛ぶような衝撃の中、和装の時には下着の類は一切身に着けないのが基本であるという知識を思い出す。最近には身に着ける者も少数派ではないようだが、古風な家で育ったお団子頭の大和撫子は、昔からの流儀を律儀に守っているのだろう。

先程、胸の膨らみが異様に揺れていた事から察するに、おそらくはブラジャーも身に着けていないのではないか。呼吸に合わせ震える柔らかそうな肉唇に見蕩れつつ、頭の片隅でそんな事を考えていたメイド少年は、次の瞬間、我に返って顔を青ざめさせた。

自分がこうして椿の大切な部分を覗き込む姿勢になっている。という事は……つまり、椿の頭がある場所は――。

「はむう……んっ、ああ……ここに隠れているの……んっ……チョコレートアイス……ですか？ 熱いから、丁度いいですね……ちゅっ、んぐっ、はあむう……」

チュパツ、チュツ……チュルツ……。

脳裏に過つた恐ろしい想像を現実のものにする、卑猥な水音と下腹部に走つた熱い感触。思わず背筋を仰け反らせた拍子に、恐る恐るそちらを覗き込んだ純は、想像していた以上の光景を目の当たりにし、身体を強張らせた。

倒れた衝撃だろう。椿の着物は袂が大きくはだけ、肩はおろか大きな膨らみの頂点近くまで覗き見えてしまっている。

果たして予想した通り、本来、そこを包み隠しているべきブラジャーは見当たらず、白

い乳房と苺色の乳首は剥き出しの状態。

その高い乳丘越しに見える赤黒い棒は、散々見慣れた、自らのシンボル。

先程まで感じていた、柔らかい胸の弾力に反応したのか、広間で袖莉香に抱きつかれた時の火照りが残っていたのか、情けないくらいガチガチに膨れ上がってしまった。

本来そこを隠しているはずのスカートは、棒の着物と同じように倒れた衝撃で乱れ、腰まで捲れてしまっている。

穿いていたはずの薄桃色のショーツは、何故か右の足首に辛うじて引っかかるくらいまで下ろされている、偶然ではありえない状態。

おそらくは酩酊している大和撫子が膨らみに興味を持ち、引き下ろしたに違いない。

「ちゅっ……熱いなんて……珍しいチョコキャンディですね……ちゅっ、んぐっ、はあむ……んちゅっ、はあむう……」

酔いのせいか舌足らずの声を漏らす椿は、視点の定まらない瞳で肉棒の先端を見つめ、そこを興味深げに舌先で舐めつついてくる。

「ひゃんっ、あうあつ、ああ……ち、違います！ これは……あつ……」

慌てて言い返そうとしたメイド少年の唇が、直後、凍りついたように動きを止めた。

自分が最も隠さなければいけない大切な場所を……よりによって、部外者である他家の令嬢の目前に晒し、あまつさえその口を汚している。目前に突きつけられた肉裂に見蕩れ、意識が混乱していた純は、今更、その事の大きさを認識した。

(しや、洒落にならないよ、これ！ どうしよう！)

雇い主である柚莉香や、理解のある理沙に見つかった時とは訳が違う。まったく関係のない、しかも社交界随一の名家の令嬢に、このような粗相をしてしまったているのだ。

もしこの事実が知れ渡れば、自分や神代家は勿論、和泉家の名も二度と名譽が回復できない地の底まで落ちてしまうのは間違いない。

(どうしよう……早く隠さないと！ でも……下手に動くと……)

不幸中の幸いか、完全に酔い潰れている椿は、状況を認識できていない様子。だが、騒いだり乱暴に動いて身体を引き離したりしてショックを与え、万が一にでも意識が覚醒してしまつたら、その瞬間、すべてが終わりになつてしまう。

「ちゆうつ……純さん……ふあつ、はあ……これえ……んうつ、不思議な味……ちゅんう……甘くなくて、しょっぱいキャンディなんですわね……あむう……」

どうしようもなく凍りつくメイド少年の気持ちなど知らず、心地良さげに酔いしれる大和撫子は、熱心に舌を動かして続けた。

酔いのせいか、燃えるように熱くなつた舌先が、膨らむ亀頭を執拗に舐め転がす。染み込む唾液が快感神経を目覚めさせ、ピチャピチャと舌先に軽く弾かれるだけでも、思わず腰が浮くような甘美な刺激が走る。

「はあうつ！ んうつ！ やめて、椿様あ！ ふあんう……！」

「しょっぱいチョコレート……ちゅぶるう、ぬちゅつ、はむう……悪くないですね……あ

ふうっ、んうっ……ちゅっ、じゅるう……」

蛇のように亀頭から肉傘にまで絡みつけた舌で引き寄せるようにして、椿は尖らせた唇へその硬い肉幹の先端を咥え込もうとし始めた。

たつぷりの唾液に塗れた粘膜が、張り詰めた亀頭肌を強く擦る刺激に、純は声を抑えきれず、その見た目に相応しい少女のように愛らしい嬌声を漏らしてしまう。

「んぐっ、はあ……ちゅっ、んうっ……何だか、咽喉が渴いてしまいました……」

「ふえあ……それなら、お水……お持ちしますから。ですから、放して……」

「んっ、このチョコアイス、ちゅっ、はあふ、溶かして飲むので、お構いなく。じゅるっ、んうっ、はむう……じゅるるうっ、ちゅう……」

くぐもつた声で呟きつつ、乱れ着物の艶やかな令嬢は朱に染まった頬を窄め、まるで赤児が母乳を求めるとな熱心さで咥えた剛直を吸い始めた。内頬の焼けるように熱い粘膜が竿の横を柔らかく圧迫し、上下に休みなく動く舌先が鈴口を舐め上げたかと思えば、そこから根元まで続く裏筋の方まで舐めてくる。

「んちゅっあ、このキャンデー……なかなかとけまふえんね。んふえ……んぐうっ、じゅるっ、んちゅああ、はあ……あむうっ、じゅるうっ、れるお……」

「んあああっ！ あ……アイスじゃ……ひゃんっ！ くっ、ああ……」

堪えようと思えば思う程、背筋が打ち震えるような快感を意識してしまい、声が次第に大きくなっていく。

綻ぶ唇から黄色い甘声を漏らす度、椿が目を覚ましてしまうのではないかと言う不安に駆られ、それが逆に胸の高鳴りを煽り、剛直の勢いが増していく一方だ。

意思に関係なく、椿の口内の更に奥の方まで伸びていく肉幹が恨めしい。

一週間前、理沙と袖莉香に弄ばれた日以来、パーティの準備で忙しく禁欲状態が続いていたのも間が悪かった。淑やかな大和撫子が、夢うつつな妖しい表情でペニスを頬張る光景は、ただ見ているだけでも絶頂の予感が腰に響いてくる程、刺激的なもの。

断続的に背筋を駆け上る痺れる快感を、純は自らが舐めしゃぶられる音を聞きながら必死になって耐え続けるのが精一杯だった。

「んうっ、不思議な味で……はうっ、何でしょう……身体……んうっ、熱くて……」

プハツと息継ぎついでに一度肉棒を吐き出した椿が、もどかしげに太股同士を擦りあわせた。その動きで、更に大きく捲れた着物の裾から、恥丘を覆う薄い茂みの辺りまでが完全に露出してしまふ。

先程覗き込んでしまっていた、蜜園。その折り重なった花卉がいつの間にか透明の雫に塗れ、ヒクヒクと今にも開花しそうに震えているのが視界に飛び込んできた。

「純さん、何だからとっても暑いです。拭いていただけますかあ……」

「ふえ、は、はい！ 拭きますから……あの、少し失礼させて……ああっ！」

これ幸いと立ち上がりかけた純の動きを遮るように、椿は自らの唾液に塗れた亀頭を再び熱い口内に啣え込んでしまった。

メイド少年は拭くものを取りにいく事も許されず、再び肉幹を包み込んだねつとりと蕩ける粘膜と、時折竿肌につつかる硬い歯の感触——異種の刺激が織り成す恍惚感にうっとり脱力してしまふ。

「んぐっ、はむうっ、純さん……は、はしたないですけど……脚の間……汗でべたついて気持ち悪く……んうっ、早く拭いていただけますか……あんうっ、ちゅっ……」

それは汗ではなく、もつと甘酸っぱい香りを放つ別の液体です。まさか、そう真実を言い返す事もできず、純は濡れ震える桜花弁を覗き込む事しかできない。

このまま放置していたら、その不快感で椿の意識が覚醒してしまうかもしれない。かといつてタオルやお絞りの類は手元にないし、服の袖では敏感な粘膜を拭くには少々刺激が強過ぎるだろう。あくまで優しく、ここを拭う為には……痺れる下腹部の昂りに、靄のかけり始めた頭を必死に働かせた純の脳裏に……一つのアイデアが浮かんだ。

ふわふわのタオルを使わずとも、優しく拭う方法はある。それを……今、自分に命じている椿が実践しているではないか。

さすがにそれはまずいと心の中で葛藤するが、他にいい案は浮かばない。かといつて悠長に悩んでいる暇もなさそうだ。

（うう……ごめんなさい、椿様！ 他に何も思いつかなくて……だからあ！）

謝罪の言葉を心の中で呟いた直後、わずかに開いた太股の間へ再び顔を埋めていく。

火照る肌が滲む汗と蜜を揮発させ、蜂蜜のように濃密で甘美な香りが充満していて、軽

く息を吸っただけで肺の隅々にまでそのうつとりとする匂いが広がっていた。

思わず鼻を鳴らし、もつと嗅ぎたくなる衝動が込み上げてくるのを抑えながら……まずは、シルク地のように滑らかな太股へ舌先を押しつけていく。

クチュツ……チュプルツ……ンツ……。

「はあっ、あふうっ！　じゅ、純さん……そこお、んあっ、ああんっ！」

その瞬間、椿は啞えていた熱棒を吐き出し、戸惑ったようにか細い声を漏らした。

「んっ、ちゅ……はあ……あの、あ、汗を拭おうと思っつて」

その声に冷や水を浴びせかけられたが如く全身を強張らせた純は、顔を上げ、激しく上下に揺れ動く双乳越しに椿の表情を窺う。熱で蕩けそうな頭で咄嗟に思いついた事だが、さすがに無理があつただろうか。今の刺激で目が覚めたとしたら……。

「いえ、ふあっ、んうっ、大丈夫です。あうっ、はあ、続けて……ください」

「あ……は、はい」

相変わらず焦点の定まらぬ蕩けた目のまま、上擦る声で自分を促す椿へ頷き返し、純は安堵の息を漏らしつつ、再び甘美な香りに満ちた股の間へ顔を埋めた。

（汗も蜜も全部舐めて綺麗にすれば……すつきりして眠ってくれる……よね、多分）

薄い氷の張った湖の上を歩いているような、一瞬たりとも気を抜けない修羅場。早くこの状況から解放されたいという切実な思いと、肺を満たした甘く蒸れた香りに背中を押され、純は再び太股へ舌先を這わせた。

「んちゅっ、ちゅっ、はあ……んうっ……」

細い糸の如く伸びた蜜液の軌跡を舌尖で辿り、少しずつ脚の付け根の方へ移動させる。捲れた着物と襦袢の裾を更に片手で捲ると、むせ返るような香りが立ち上り、思わず眩暈すら覚えてしまう。

汗と愛液に濡れた白肌は、甘酸っぱく、舌が焼ける情熱的な味わい。

口いっぱい湧き上がる唾液に混ざってそれが食道を流れ落ちると、肺だけではなく腑までもが、この美しい大和撫子の香り一色に染まっていきそうだ。

「純さあん……そのまま、汗、綺麗にしてください。あふっ、何だか、んうっ、こんな汗の拭き方は初めてで、癖になりそうですう」

「はい、椿様……んっ、ちゅっ……はあんっ！」

舌の動きに合わせて、大和撫子は頭の脇にぐったりと投げ出した両手の拳を固め、熱っぽい吐息を漏らしていた。呂律も回らなくなってきたいて、意識がより酩酊してきているのは火を見るより明らか。このまま水飴のように蕩け、前後不覚になってくれれば、バレる事なくこの場を乗りきれよう。

その為にも、求めに応え……もつと心地良く感じさせなければいけない。こうしている間も舐め転がされている肉幹から伝わってくる快感が、頭の片隅に残っていたわずかな理性も痺れさせ、純は衝動に流されるまま、舌を熱心に動かし続けた。

チュルッ、チュパッ……ニチュウウ、ジュルルッ！

丸めた舌先で付け根を湿らせる熱液を掬い取り……そのまま、花卉の綻び始めている雌裂の縦筋を舐め転がし始める。

「ひやうつ、ああ……あふうつ！ はあつ、あ……」

跳ね上がる声と共に、色鮮やかになった小陰唇が生き物の如く蠢き、左右にゆっくりと広がる。滝のような勢いで溢れ出てきた愛液を、丸めた舌で丁寧な舐め取っていく。

彼女を酩酊させているアルコールが、この蜜の中に溶け出しているのか。そう思うくらい、甘液が流れ落ちてくる臓腑が燃えるように熱くなってきた。

「じゅるっ、ちゅっ！ 塩水、たくさん出てきましたあ。んうっ、ちゅっ、あはあ……少し苦くてしょっぱいけど……美味しいです、これえ。んうっ……はむうう」

肉幹の根元に溜まったマグマのような熱感が、ジュルリと音を響かせる椿の強烈な吸い上げで、尿道を少しずつ昇り始めた。その味わいが男の欲望の証のものであると気づく事なく恍惚と味わっている姿は、先程パーティー会場で見た、何事にも動じぬ淑やかな姿からは想像もつかないもの。

あくまで、この場を誤魔化す為にやっている。必死に自分へ言い聞かせながら、純はこの背徳的なひと時に浸ってしまいたいという衝動を堪えきれなくなってきた。

（駄目だよ、このままじゃ！ バレたら、柚莉香様にも迷惑がかかるんだ。は、早く終わらせないと……くっ）

吹き飛びそうな理性を繋ぎ止め、自らを叱咤する。何より、これ以上時間をかけると、



一週間溜め込んでしまっている欲望の証が決壊してしまいそうだ。

早く、言いつけられた勤めを終わらせ、椿に満足してもらうしかない。その一心で、純は蜜の代わりに自らの唾液で薄くコーティングされた割れ目を、大きく左右に広げた。

「全部、綺麗にしますから。ちゅぱっ、ちゅっ、じゅるっ……んっ」

ジュルルルウツ、ヌチュツ、ニユルルツ、ジュブウツ！

パツクリと口を開けた、充血した肉唇。その隅々を、甘い味わいに蕩けかけている舌で舐め回す。肉ヒダの重なりあうわずかな溝は勿論、中央に開いた小さな穴口の周り——そして、縦筋の上で豆粒のような頭を覗かせている真珠色の粒まで。

「ひぐっ！ ふあっ、あんあっ！ 純さあ……ひっ、ああ！」

「んふあっ、んっ、ああ！ ちゅっ、ちゅあ……んうっ」

普段通りの生真面目さを発揮し、端から端まで舌を這わせ、蜜を舐め取っていく。代わりに自分の唾液をたっぷり塗まぶしてしまっているのだから、本末転倒になってしまっているが、最早そんな矛盾に気づけないくらい、口に広がる甘ったるい味わいと下腹部の痺れがメイド少年の頭を蕩けさせていた。

「私……んうっ、咽喉が……んちゅっ、もうカラカラで……はふあ」

「あの……やっぱりお水取ってきましようか。ここも綺麗になつてきましたし……」

「大丈夫です。これ……ここから塩水、まだまだたくさん出てるう、ちゅっ、んんっ！」

一際大きく上擦った声と共に、椿の唇が肉傘の付け根へ深々と食い込んできた。

そのまま根元から吸い込まれてしまいそうなくらい力強く吸い上げられ、パクパクと口を開ける鈴口を舌先で穿られる。

鳴り響く卑猥な水音と、視界が白く染まる鮮烈な快感。舌応なしに身体が硬直し、舌で舐め突いていたクリトリスを、反射的に前歯で甘噛みしてしまう。

「ひうううっ、ああっ!! はううあっ、あ……イッ——きやううっ!」

「ふえあっ、椿様……それ……あふうっ、あああんっ!」

——ビュクリユルッ! ドブリユウツ、ビュクツ、ビュクウツ!

椿が軽く腰を上げ、狂おしく悲鳴のような甘声を上げると同時に、純は身体の芯で何か弾け飛ぶような鮮烈な快感に襲われた。尿道を勢い良く駆け上るマグマのような迸りを堪える事もできず、ただ恍惚とそれを啜え込む大和撫子の口内へ放つていく。

「んぐんぐっ、じゅるっ、んちゅっ!! はふっ、今度はプルプルのコンソメゼリーがたくさん……不思議なキャンディですね。色々な味が楽しめてえ……あふう」

「はあうう、はあはあ、あの……うう……」

口に出された男の欲望を、それと知らずに咽喉を鳴らしてうっつとりと飲む椿に、純は罪悪感を覚えながら、何も言う事ができなかつた。その罪滅ぼしとばかりに、鯉口の如く開閉を繰り返す割れ目の中央へ唇を当て、奥から溢れ続けている蜜液を啜り続ける。

「ひゃあ、はうンツ、あふう。身体が、もう……」

「ちゅっ、はあはあ……あの……椿様?」

強気な声と共に肉棒を締めつける、痛いくらい狭い肉壺は、想いを告げあつた金髪の嬢。その強気な性格に相応しい、まるで両手で思い切り握り締められたような強烈な圧迫感、快感神経が活発になつている肉棒にとつて、とても耐え難いもの。腰から下の感覚がなくなり、根元に集まり始めた熱液が瞬く間に搾り出されてしまふさうだ。

「純ちゃあ……んうっ!」「あふうっ、ああんっ!」「くふあつ、ひやうっ!」

すつかり火のついでにしまつた乙女達は、入れ替わり立ち替わり、純の上に跨がってくる。三人の透明な蜜に塗れた肉棒は、それぞれに特徴ある感触に舐めしゃぶられ、今、誰の膣内に収まつているのかもわからなくなるくらい翻弄されてしまつている。

(もう駄目だよ、こんなの! ボク……我慢できないよおっ!)

めまぐるしく入れ替わる乙女達。快感に酔い、視界も揺らいでいく中、純は今、誰が自分の剛直を迎え入れているのかもはっきりと認識できなくなつてきていた。

このままでは自分の意志と関係なく、瞬く間に精を放つてしまふ。それだけは絶対に避けたい。切実な思いが、痺れていた腰にわずかな力を取り戻させる。

「純っ、あうっ! はあつ、ああつ! ふ、震えてるう……オチンチン……」

次の瞬間、聞こえてきた息も絶え絶えの想い人の声と、肉棒が潰されそうなきつい締めつけ。今が最後のチャンスだと気持ち奮い立たせた純は、わずかに残つた力のすべてを込め、腰を大きく跳ね上がらせた。

グチイツ、ズプリユツ、ヌプウウツ!

「はぎいつ、ああっ！ 純うつ、あつ、ふああああっ！」

不意打ちに近いメイド少年の突き上げに、柚莉香は長い金髪を大きく振り乱しながら、大きく背筋を仰げ反らせた。

敏感な反応に心を燃え上がらせた純は、胸に溢れる思いを伝える為、今にも破裂しそうなくらい硬く膨らんだ亀頭を、最奥へめり込ませるような強さで抽送を続ける。

「出したい、ボク、柚莉香に……出したいですうつ！」

「ふあつ、あつ、じゅ、純！ んんつ、そうよ……あうつ、純の……もう全部、あたしのだもん！ 椿や理沙に……渡さないからあ！」

息を切らして訴える純の言葉に、荒々しく肉壺を掻き混ぜられる刺激に顔を顰めていた柚莉香が、嬉しげに尻尾を下げて喘ぎ叫んだ。その歓喜を伝えるように、肉穴が剛直に張りつくように締まり、淡く閉じられた瞳の端から透明の雫がポロリと垂れ落ちる。

「柚莉香……ううつ、はあつ、もつと……突くうつ、はひつ、ああっ！」

「きて、純！ いっぱい、強くうつ！ ひぎいつ、あんつ、ふあああつ！」

二人の感極まった声が重なり、甘い雰囲気か二人を包み込む。息を切らし、柚莉香も髪を振り乱しながら純の求めに答えようとした刹那、はだけた左肩へ西瓜大の対の膨らみがグニユリと押しつけられた。

「ふふつ、今日はお嬢様に譲らないと駄目みたいですね。……んつ、とてもいい顔をされていますわ、今のお嬢様と純ちゃん。妬げちゃうから……少しお仕置きを。んう」

「ふあつ、理沙！ にやあうつ、きやふあうつ、んちゆつ、ああつ」

諦めたように小さく呟く巨乳のメイドが、自らの仕える令嬢を慈しむように間近で見つめつつ、その頬を甘える子猫のようにチロチロと舐め始めた。

突然の事に大きく背筋を仰け反らせ、恥ずかしげに顔を歪めながらも、柚莉香はそれを振り払う余力もなく、ただされるがままになっている。

「ふふつ、甘くて美味しいですよ、お嬢様のほっぺ。唇は、もつと甘いかしら。純ちゃんのおチンチン、譲つてあげますから……その代わりに……ね」

「あむつ、んっ！ 理沙、あんっ、ちゆつ……あつ！」

理沙は柚莉香の耳にかかった髪をかき上げ、現れた耳たぶをチロチロと舐めてから、その舌先を綻ぶ小さな唇へ押しつけていった。まるでキャンディを舐めるような丁寧な舌使いに、柚莉香も恐る恐る舌先を出してそれに応える。

チュツ、チュパツ……。

仲の良い姉妹のような二人が淫らにじやれあう姿と、響き聞こえる唾液を分かちあう淫らな水音。思わず見入ってしまった腰の動きを止めていると、さり気なく伸びてきた理沙の手に、力なく投げ出していた右手を掴まれてしまった。

一体何事かと目配せで訴えると、理沙は掴んだ純の右手をそのまま自らの股間へと導いていく。既に何度も肉幹が出入りし、熱く花開いた蜜園。そこに指先が触れると同時に、柚莉香の唇を食う先輩メイドは、艶やかな流し目を送ってきた。

肉幹を柚莉香に譲った代わり、自分はこれで慰めて欲しい。無言の求めをすぐに悟った純は、すぐに重なりあう肉皺を解すように指を滑らせ、小さく開いた穴口を穿り始める。

「ひやうつ、あんつ！ そうつ、純ちゃん……ふふつ、上手……あつ、あくう！」

「んっ、ずるいですわ純さん。私にも、ちゃんとしてください」

理沙が満足げな喘ぎ声を上げると同時に、左側に寝そべるようにして身体を擦りつけてきた椿が、切なげな吐息を漏らす唇を頬に押しつけてきた。

「椿様……んちゅっ、あつ！ んっ……ン」

「あむっ、はあつ、さつき口付けをするのを忘れていましたので。今は、これで我慢します……んうっ、はむっ……ちゅっ……」

頬を伝ってすぐに唇まで到達した和装の令嬢の小さな唇が、激しく息を切らすメイド少年の唇を隙間なく塞ぐ。息苦しさに意識が遠のくと共に、口内に差し込まれた熱い舌先。

反射的に応じ、舌をぎこちなく絡めながら、左手をはだけた着物の裾へ伸ばし、理沙にしているのと同じように、肉棒で十分に突き解した肉裂を指で弄ってあげる。

「ふあつ、あつ、純さん、やつぱり可愛くて……諦められません。ちゅっ、んっ……柚莉香さんの我が侷に愛想を尽かしたら、いつでも私のところへきてくださいね」

「ちよつと、椿！ ドサクサに何を……むうっ、あうっ！ 理沙……んうっ、ちゅっ、そんなに唇うっ、あふっ、んっ、ああつ！ む、胸もおっ、ひゃんっ、ふあああつ！」

「ふふっ、純ちゃんも可愛いですけど、やつぱりお嬢様も可愛い……んっ、はむう……二

人まとめて食べちゃいたいくらいですわ」

冗談っぽく囁きながら、理沙は舌を絡めるように動かしている。そうしながら、片手を揺れる柚子香の美乳へ伸ばし、楕円に潰れるくらい強く掴んでしまっていた。

その艶かしい光景を、自分の顔を覗き込むようにして唇を重ねてくる椿のお団子髪越しに眺めていると、下腹部の燃え上がるような昂りがいよいよ耐えられなくなってきた。

全身を乙女達の熱感と甘い香りに包まれ、身も心もこのまま蕩けてしまえそう。思考力がごっそりと削られ、熱に冒された脳裏に残ったのは……このまま、みんなで甘く幸せに達してしまいたい。ただその一心だった。

「柚子香……んうっ、理沙さん、椿様……ボクう……もう、駄目ですうっ！」

自分を慕ってくれる乙女達の名前を叫ぶと同時に、純は両手の指を弄るそれぞれの肉壺へ突き入れ、腰の動きを一気に加速させた。

グチュルツ、ズブウツ、ズブウウツ！

「ひぐうっ、ふあんんっ！ 純っ、ひゃああっ！ イッ……ふあんうっ、あああっ！」

座り込む柚子香の小さなヒップを押し上げるように、焼けた鉄棒の如く雄々しくそそり立った肉幹を、根元までしっかりと突き入れる。

皺も残らないくらい、ギリギリまで押し伸ばされた膺壁を竿肌が抉るように擦り、透明の液体を滲ませる先端が子宮口をこじ開けるような荒々しさと突き刺さる。

「ふふっ、純ちゃんっ、エッチの時だけは本当に男らしい……んうっ、ふあんっ！」

「ちゅっ、はうっ、で、でもお……そんなところも素敵です……ひゃあああんっ」

長い金髪を振り乱し、薔薇のような香りを振り撒きながら乱れる袖莉香をうつとりと見つめつつ、理沙と椿もそれぞれに蜜壺を穿られる快感に背筋を震わせ、絶頂の近づきを知らせるように肩を震わせていた。

三人とも額に汗の雫を浮かべ、普段の凛々しさを感じさせないくらい蕩けきった女の表情に変わっている。彼女達をこんな風にしてしまっているのは、すべて自分。本当にこれで良いのか、今更ながら疑問が込み上げてきてしまう。だが――。

「いいわっ、純ちゃん、もつと……奥、いっぱい穿つてえっ！」

「あうっ、ちゅっ、舌を……絡めて……あむっ、純さんの唾液を飲ませてくださあい……んはひっ、はあっ、イツ……んうっ、もう……身体が飛びそうですう……」

「きてっ、んうっ、ふあっ！ 純、ちようだい！ また、奥う、お腹で……し、子宮で純を感じさせて！ あたしの、あたしだけの純だつて……ふあんっ、ひゃあああっ！」

それぞれの感極まった求めの声を聞いていると、それに応えなければいけないという使命感が湧いてきて、理性を吹き飛ばしてしまふ。

これもまた、幼い頃から他者へ尽くす事を義務付けられた、使用人の名家、神代家に生まれた人間の性か。心の奥で苦笑しながら、自分の大好きな乙女へ愛を、想ってくれている乙女達へ感謝の想いを伝えんとばかりに、指と肉棒を深くへ押し入れていく。

グチイツ、ズブブツ、ズポオツ！

理沙の蕩ける肉壺を二本の指を泳ぐように巧みに曲げ伸ばしを繰り返して、子宮口をくすぐれる位置まで押し込む。時を同じく、椿の肉壺を、洪水のような愛液の流出を栓するように三本の指でぎつちりと埋める。それぞれに空いた親指で割れ目の端を押さえ、そこにある包皮に隠された肉粒を刺激してあげる事も忘れない。

そして小さなお尻をキュツと窄めて腰に残ったすべての力を込め、純潔を失う前と同じくらいに狭まりかけていた愛しい令嬢の肉壺の最深部へ、一呼吸でねじ入れた。

「ひうつ、あああああつ！ イツ……んあつ、んつ、くうつ、ふあああああつ！」

埋まる肉傘が弾かれ、脈打つ表皮が粘膜壁を薄く覆う熱液を残さず舐め取り、強く擦る。根元まで込み上げていた熱い进りの予感が脳髓を痺れさせ、三人より一足先に達してしまふ事を抑えられない罪悪感に胸を膨らませた——その瞬間。

「ふあああああつ！ いきゅつ、純つ、あつ！ きてえつ、びゆくびゆくつて……また……はひいつ、ふあああああつ！ 好きいつ、あああつ！ イクツ……くうつつ！」

「純ちゃん……んう、お嬢様あつ、あんつ、イツ……ふあつ、あんつ！」

「はひつ、純さんの唇うつ、あつ、ゆ、指でえ……はふあああああつ！」

部屋中に響き渡る、乙女達の甘く狂おしい嬌声。

指と肉幹を舐め扱くように脈動を始めた膺壺の感触が、三人がほぼ同時に達してくれた事を、何よりも雄弁にメイド少年へ教えてくれた。

何とか彼女達を満足させる事ができた。そう安堵すると同時に、我慢の糸がプツリと切



れる音が脳裏に響く。

絶頂の余韻で痙攣する肉壺が、剛直を隅々まで握り締めるような強さで圧迫する。

それを押し返すように、熱棒が一回り大きくなった刹那。ドクドクと全身に震えが伝わる程の激しい振動と共に、根元からマグマのような熱く濃厚な感触が込み上げてきた。

「ひやうううっ！　でりゅっ、でちゃあっ、あんっ、ひふあああっ！　イクッ、中にまた……で、出ちやうよおっ、出るっ、ふあんっ！」

ドブツ、ブリュルルルツ、ビュクウ！　ドブブブツ！

絶頂で更に一回り狭まった愛しい令嬢の熱壺の中、口から心臓が飛び出そうな鼓動の高鳴りに合わせた勢いの良い进りが、大きく開いた鈴口から噴き出した。

雄々しい肉棒の形に押し伸ばされた膺壁のあちらこちらをドロドロに汚し、亀頭で十分に突き解していた最奥の肉室へと怒涛の勢いで流れ込んでいく。

「純うっ、あうっ！　はあっ、お腹、こんなにたくさんうっ……ひやつ、ああっ！」

「ふふっ、良かったですわね、お嬢様……んっ、ちよつと妬げちゃいます。あむう……」

「本当、こんなにたくさん。私の時よりもたくさん出して……ずるいです、純さん」

「ふえあっ……そ、それは……あの……あむっ、んうっ、ちゅああっ！」

身体が浮くような恍惚の絶頂に包まれた袖莉香と純は、同じく絶頂に蕩けた顔の理沙と椿の冗談混じりの嫉妬の言葉と甘い唇に襲われる。

想いあう恋人達の甘い感情を、分け与えて欲しい。そんな強い意志が伝わってくるよう

な勢いで唇を貪られ、口内を隙間なく舐められていると、絶頂の余韻がいつまでも引かず、このまま意識が白い光の中へ消えていってしまいうさだ。

「こ、これで、諦めなさいよね、二人ともお。この子は……純は、もう、あらひのものによにゃのお……ひゃあんつ、ふぁ……はうつ……」

「ひゃつ、あうつ、柚莉香……んうつ、あつ……」

嬉しそうに頬を緩めながら、金髪の令嬢は糸の切れた人形の如くがっくりと崩れ落ち、恍惚とするメイド少年の上に覆いかぶさってきた。

純は咄嗟に理沙と椿の痙攣する膈内に唾えられたままになっていた指を引き抜き、倒れ込んできた想い人の身体を受け止める。

零れ落ちた乳房が胸板で押し潰れる感触にうつとりとしながら横顔を覗き込むと、柚莉香は満足げに頬を緩めたまま、意識を失ってしまった様子だった。

「ふふつ、お嬢様ったら……」

「んっ、勝ち逃げは許しませんわよ、柚莉香さん。でも……今日はもう……はう……」

傍らで見守る理沙と椿も、それぞれ脱力したようにベッドの上に身を転がし、ただ小さく息を切らすだけ。今の激しい絶頂で精も根も尽き果てたようだ。

みんなそれぞれに満足してくれたらしい乙女達の姿に安堵していると、立て続けに精を放った心地良い疲労感が、純の身体を毛布のように包み始めた。

「はふう……もう少しだけ、頑張らないと」

三人の温もりを肌と感じ、このまま眠りに落ちたい。そんな欲求を振り払い、少しよろめきながら身体を起こす。

自分を愛し、求めてくれた美しい乙女達。白濁と蜜と汗、淫液に塗れた彼女達をこのまま放置しておくなど、どうにも気持ちが悪く落ち着かない気分だ。

これは恋人への愛情や、自分を想う乙女達への感謝の念だけではない。幼い頃から心に植えつけられた、使用人としての使命感。身に纏ったままのメイド服の影響もあるのか、それを忘れる事はできなさそうだ。

「これが……最後のお仕事かな、メイドとしての」

一体どんな日々になるのか。不安だらけだったメイド生活の最後を、この素敵な乙女達のお世話で締めくくれるなら本望。そう思いながら疲れた身体に鞭を打った純は、少しの寂しさと明日への大きな期待に胸を膨らませ、ゆっくと立ち上がった――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で
好評
発売中

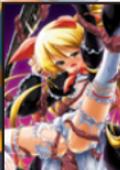


不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!
ちよびのマジな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

白装の騎士
ピルグリムメイデンII

「小説・狩野景 / 挿絵・ぼち」

全国書店で
好評
発売中



吸血姫と狩猟者三人の影が闇を斬る
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画
が希望のノベライズ!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜

「小説・夜士郎 / 原作挿絵・渡瀬行人」



「カースイーター」
呪詛喰らい師
「小説・蒼井村正 / 挿絵・或土せねか」

2010 4/30
発売予定!!



**セクシー退魔師が荒ぶる神様をエッチな
ご奉仕で鎮める伝奇アクション!**

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- 仙留字艶戦姫 / ノナカシ ①~③
- 悪番期なアダム ①~②
- 純純帝都少女探偵団、赤い謀略を撃て!

- 借金お嬢クリス ①~②
- プリンセスリバーシ! 交誼する美姫と魔姫

- 無敵の姫騎士がSMに目覚めたようです
- ピルグリムメイデン 深紅の巡礼聖女

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!